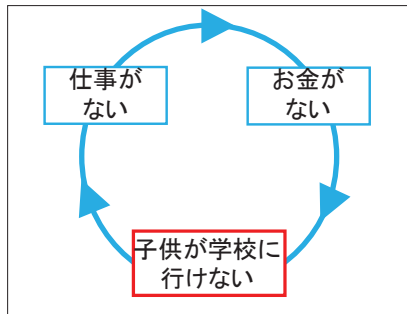


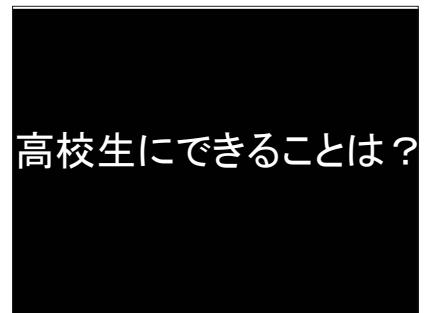
学生団体北の高校生会議

タイトル	国際協力の輪を広げたい～北の高校生会議の活動を通じて～
応募者氏名	田中駿介
作品を通して伝えたいこと	「まずは知ることが第一歩」 講師のお願い、広報などを含め、運営は全て高校生で担当するというきわめて自主性の高いプログラムを企画しました。「貧困」の問題にどのようにアプローチをしていくのか、これらの議題について徹底的に議論しました。「こんなにも考えは多様なんだ。」「進路を考え直してみようかと思った。」国際問題に興味のある参加者から、全く異なる分野を志望している参加者までが、一丸となって議題に取り組むことで、新しいネットワークが生まれました。今後、さらにこの輪を広げていきたいと考えています。
実践者氏名／団体名	学生団体北の高校生会議 代表 田中駿介
実施日・期間	第一回開催時 2015年1月6～8日 第二回開催時 2015年7月31～8月2日 第三回開催 2016年3月21～3月23日
主な実施場所	第一回開催時 国立大雪青少年交流の家 第二回開催時 大沼国際セミナーハウス及びネイパル森 第三回開催 ネイパル深川（予定） その他、アウトリーチ活動多数
取り組みへの参加者及び人数	第一回開催時 高校生 16校 35人 第二回開催時 高校生 4校 15人 報告会（北海道議員、旭川市議員、行政関係者、報道関係者、一般市民、JICA関係者）
目標・ねらい	スローガン「夜明けまで語ろう」 ・高校生が社会問題をより身近なものとして捉えるきっかけをつくる ・高校生同士、更には社会人を交えた新たなネットワークを形成する
具体的な取り組み内容及び工夫・配慮した点等	第一回、第二回共に、原発、教育、貧困、地域活性、防災、安全保障のほか、国際貧困を主要な議論として扱いました。 第一回開催時には、スタディーツアーに参加し、ボランティアのために「カンボジア」に行ってきた札幌市内の高校生二人がプレゼンテーションを行いました。プレゼンの内容は主に発展途上国である「カンボジア」の実態です。現地の学校の写真などが紹介されました。このプレゼンテーションから、参加者の多くは私たち日本人がいかに恵まれた環境に置かれているかということや、必要を満たされていないカンボジアのような国があるのに対して、日本では必要はもちろん便利をも追求しているということを学ばされたという声が多くありました。 プレゼンテーションの後、「私たち高校生がどのような形でカンボジアなどの発展途上国を支援できるか」という議題について話す予定でしたが、「国際的な枠組みの中から、支援のあり方を見据えるべきではないか」あるいは質問がたくさん出たため時間が足りず、その議題についてのディスカッションは夜ゼミへと持ち越されました。夜ゼミでは例の議題について掘り下げて話し合われました。結論は出なかったもののお金や物資などの一時的な効果しかもたらさないものより、これからの彼らの生活を支えられるように、収入につながるような技術を支援すべきだという意見が多数派でした。また、彼らが貧困と感じておらず現状に不満を抱いていないのなら他国が支援する必要はないのではないか、という意見も出ました。ここで私が感じたことは先進国と発展途上国では貧困の基準が違うのだということです。カンボジアの子供たちが自分たちの生活を貧困だと思っていないという事実から彼らは経済的には貧しくても心の貧困は無く、逆に毎年たくさんの自殺者を出している日本は経済的には満たされていても心の貧困があるのではないか、ということが話し合われました。 これらの議題を通して貧困というテーマについて深く広く議論することができました。またこのテーマを通して日本の現状をみつめなおすこともできました。 会議終了後、札幌市内の北海道 JICA センターにて、「北の高校生会議×JICA

	<p>セッション」と題し、高校生会議での成果と課題について報告を行いました。まず、運営委員の秋山、河野より、高校生会議についての概要を紹介しました。その後、参加者の笠原さんより、インドネシアのスタディーツアーに参加した経験をプレゼンテーションしました。笠原さんは、まずインドネシアで体験した、下水道が整備されていないなど、日本とは異なっている現地の暮らしの実情について紹介し、プログラムを通して学んだ現地の子供達との間に生まれた絆の深さについて述べました。</p> <p>その後、「真の平和を実現するために」ということで、近現代の歴史を振り返り、特に先の大戦において、米国が日本に投下した原子爆弾について焦点を当て、広島の子供達の平和活動を紹介しました。また、憲法のあり方についても問題提起し、主体的に「真の平和」について考え、行動する必要性についてプレゼンテーションしました。</p> <p>また、その後に、松島所長などの参加者の方々と意見交換会を行い、「更に主体的な高校生の意見が取り入れられた方が良い」などとの意見を頂きました。</p> <p>松島所長が「国際協力には二通りの方法がある。一つは慈善事業で、もう一つは開発である。慈善事業は募金などに参加すること。開発は、JICAなどの組織が実際に途上国で行っている事業である。」「まず高校生は、途上国の実態を知ることが重要なのではないか。」とお話されていたことが印象的だった。今回、北の高校生会議では「そもそも高校生は、途上国の支援など行えないのではないか」という意見もあがったが、「知ること」「考える」ことは新しい一歩に必ず繋がると改めて学びました。(写真は、JICAセッションを終えての写真です)</p> <p>そして、活動の成果は、文集という形でまとめ、一般市民の方が閲覧可能な状態にしています。</p> <p>また、第二回の高校生会議では、ネパールに実際に青年海外協力隊員として派遣された経験がある方に講演をして頂いた後、同様に「途上国の支援の在り方」について議論しました。また、旭川市内で第二回北の高校生会議報告会を企画した際には、北海道議員、旭川市議員、行政関係者、報道関係者、一般市民のほか、JICA関係者にも参加して頂きました。</p>
<p>教材・資料</p>	<p>別紙に添付しました。</p>
<p>成果</p>	<p>「こんなにも考えは多様なんだ。」「進路を考え直してみようかと思った。」という声を参加者からもらいました。他にも、実際に新しいアクションを起こした参加者もいます。第2回、第3回「北の高校生会議」の運営委員も、会議に参加して魅力を感じて名乗り出てくれました。他にも、新たに「高校生集会」を企画した参加者もいた。OB会は、既に3回が開催され、ゼミを行ったり、旭川市長への提言などを企画しています。また全国の高校生、大学生を対象にしたインターネットのビデオ通話を利用した議論を行うという会議を企画した参加者もいます。「新しい行動に繋がったこと」このことが一番の成果です。</p>
<p>今後の展開、発展 (この取り組みの生かし方)</p>	<p>今後は、さらにコミュニティーの輪を広める活動をしたいと考えています。内向きに議論をしても、発展は生まれません。より多くの人を巻き込んで、深く議論を行いたいと思います。</p> <p>また、会議のための会議、議論のための議論ではいけないとも考えています。今回の企画は、一人ひとりが「国際協力」の問題を考える「きっかけ」にはなったと思いますが、あくまでもそれは「新しい何か」を始める「第一歩」に過ぎないと思います。参加者が実際に何らかの形で「国際協力」を行う「第一歩」となることを願います。</p>







<p>プレゼンターとして、納得するプレゼンが出来なくて悔しかったです。でも、貧困の原因は多方面から関わっている事を今回実感したし、もっと勉強して考えなきゃいけないと思いました。時間を与えて下さって本当に感謝しています。</p>
<p>貧困について今回が初めて真剣に考えた場でした。何を基準に貧困と言うのか、本当の貧困とは経済面だけなのか、ものさしは何なのかという疑問を持ちながらプレゼンを見ていました。</p>
<p>カンボジアの現状について理解しやすいプレゼンでした。でもだんだん政治的な話になって、話についていけなくなったのが少し残念だった。もっと発展途上国について勉強しなきゃと思った。</p>
<p>高校生にできることは少ないんだなと感じた。普段は何も考えずに生活していたけれど、食事できる、学校に通えるということがすごくありがたいことなんだなと思った。いろんな国についてももっと勉強したいと思う。</p>
<p>当麻町の地域活性はとても画期的で、とても小さなことから始まっていると思いました。また、高校生にもできることを模索する必要があるとディスカッションを通して強く思いました。</p>
<p>貧困＝お金がないこと という考えがなくなった。お金がなくても生きがいを感じているカンボジアのひとたちの方が日本よりずっといい国だと思った。でも、土壌の問題で、雨が降ったら寝られなくなるとか、服を着られない人がいるとか、そういうことはいち早く改善してほしいと改めて思った。</p>
<p>とても難しいテーマだと思った。経済的な面で自分たちにできることは限られていて難しいと思ったが、精神的な面で子どもたちの心のケアはできるのでは、と思ったし実際にできるとも思った。</p>
<p>実際に見たからこそ語れるカンボジアの現状。「貧しいとは何か」「幸せとは何か」と様々なことを考えさせられるプレゼンでした。何も困らない生活が当然であると思うだけではいけないと危機感を抱きました。</p>
<p>自分たちはこんなに裕福な生活をしている中でカンボジアの人々や途上国の人々はいつ死ぬかわからないような生活で医療施設もままならない状況で生活していると思ったら少しかなしくなりました。</p>
<p>実際にその目で見て来られた貧困国の現状や体験談を聴くことができたのは自分にとっても貴重な経験でしたし、日本だけでなく世界にも目を向けるきっかけになると思います。</p>
<p>貧困についてディスカッションをする機会はありませんでしたがその現状について詳しくは知らない人同士で話すことがほとんどでした。しかし今回の経験を糧にして当事者のことを考えていきたいと思っています。</p>
<p>日本にいととなかなか考えることが無い、この問題。実際の話を知ると、貧困について考えることはとても奥が深いことなんだと気づくことができました。本当の幸せとは何なのか、いまだに考えてます。ありがとうございます。</p>
<p>日本に住み続ける限り、貧困（いわゆる、南の貧困）は、テレビの奥の世界でしかありません。しかし、同じ地球に住む者として、彼らの尊い命が簡単に奪われることを考える、そして、本当の貧困とは何かを考えるいい機会となりました。ありがとうございます。</p>
<p>貧困問題を考える上で、どういった立場でどういった視点で見るとよいかによって大きく論点は異なることがわかった。そもそものゴールが明確になることさえも人それぞれ違い、良いディスカッションになったと感じた。</p>
<p>貧困とは何か→幸福とは何か→人間とは？ 様々な疑問が生まれてきて、自分の中でも(話し合いでも)焦点が合わなかった。実際に同年代の高校生が海外へ行って問題に立ち向かっているのを見ると、自分の暮らし・立場・視点を見直さざるをえなくなった。</p>
<p>僕は、貧困だから幸せでないかと思っていましたが、このディスカッションでそれは自分の偏見であることに気づきました。事実と真実が違うことを改めて実感することができ良い経験になりました。</p>
<p>貧困で苦しむ人がいると聞いても今までは実感がありませんでしたが、現地に行った様子を聞く和别人事ではない気がしました。先進国の工場問題は私達も関わることで、フェアトレードなどに協力したいと思っています。</p>
<p>貧困と聞くと飢餓状態が続く、衛生管理ができていない、と思うことが多かった。それはもちろんそうだと思います。しかし、日本とカンボジアを比較するから貧困だと考えてしまう。という言葉を知って私の考えは変わりました。プレゼンテーションを見てカンボジアの方々は笑顔が素敵で生き生きしている。と感じました。生きていくための最低限の生活ができないというのは貧困だと思います。しかし笑顔がなく幸せを感じない、ということも同じ貧困だと私はおもいました。今回をきっかけに私ができることをみつめて少しでも力になりました。ありがとうございました。</p>
<p>現地に行かなければわからないカンボジアの現状を知ることができ、大変勉強になった。が、ディスカッションの論点が最後まで明確にならなかったのは残念。プレゼンではただ報告をするだけでなく、話の軸を提示し、体系的な議論を行う素地を作る工夫をお願いしたい。</p>
<p>プレゼンターの二人はすごく優しいんだなと思います。何を貧困と定義するのかとか、貧困を不幸と決めつけるのかとか、生活水準を上げてやる支援は正しいのかとか、難しいことたくさん葛藤があったと思います。それでもなにかやらなければ思っている二人はとても素敵だと思います。</p>
<p>機会の貧困、これは日本でも深刻だと思います。あまり日本の貧困は問題にならないために今回は議論にはならなかったのですが、いつかその議論がうまれるといいなと思います。</p>
<p>高校生の私たちには、具体的な支援というよりも貧困の価値観が世界単位で異なっていて、どの程度ならば幸せに暮らしていけるのか？ということを知る必要があると感じました。</p>
<p>「貧困」といっても様々な捉え方があるわけで、発展途上国に住んでいる人々がその定義に当てはまるのか否かと考える人もいれば、先進国に住んでいる人でも「貧困」に陥っている人々もいるのではないだろうか考える人もいます。多様な考え方があって当然ですが、その一方で忘れてはいけないことがあるように思います。「全員で社会をつくろう（＝幸せを追求しよう）」ということです。 リカードという経済学者が「比較優位」という考え方を述べています。簡単に言えば、貿易をすることはお互いの国にとってよいことだという理論です。ただ一人だけが「幸せ」を感じている状態ではなく、みんなで「幸せ」を目指そう、そのほうがお互いの幸福度合いが高まるのだと、こういうことです。 発展途上国の人も、先進国の人も、全世界の人々が「幸せ」を目指すためには何をすべきなのか。他者を見つめる謙虚な姿勢でもって考えるべき問題なのではないかと思っています。</p>
<p>このプレゼン、またディスカッションに参加するとしなくてはいけません。貧困に対する自分の考え方は180度違ったものだったと思います。貧困は、ただ貧困というだけでなく経済なども取り巻く難しい問題だったと思います。</p>

▲「貧困」の議論を終えた参加者の感想（アンケートより引用）

